

## IV、階級社会と近代経済学（続き）

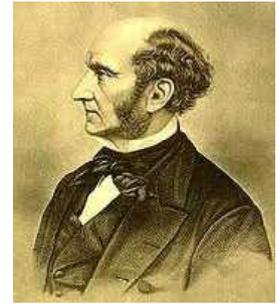
### J.S.ミル（J.S.Mill, 1806-1873）

J.S.ミル『経済学原理』1848年

J.S.Mill, *Principles of Political Economy*, 1848

J.S.ミル『自由論』1869年

J.S.Mill, *On Liberty*, 1869



#### （1）精神の危機

「私は（父の英才教育により）、愛情のない恐怖の中で成長した。、、私は、他人の指示を待つ消極性、自発的道德の欠如、他人に促されないかぎり、道德感情や知性すら作動しない、という習慣を身につけてしまった。」（ミル『ミル自伝初期草稿』99頁）

#### （2）観念連合（功利主義の教育応用、世界初の実験台としてのミル）

「何か実際の困難にぶつかった場合なら父に相談するのが一番自然だったろうが、このような場合に父の助けを仰ぐ気には毛頭なれなかった。・・・私の教育は全く父の仕事であって、それはこういう結果に終わる可能性など少しも考慮せずに行われてきたものであった。」（ミル『ミル自伝』122頁）

「私がいつも父の口からくどいくらいに聞かされ、私自身確信するようになったのは、教育の目的は、できるだけ強力な観念連合体を作ってやること、言い換えれば、全体に利益をもたらすような事には快い観念連合を、また全体に有害なことはすべて苦痛の観念連合を与えてやるということであった。」（ミル『ミル自伝』122-123頁）」

#### （3）自由の範囲＝危害原理

「社会が個人に強制と管理でもって干渉するとき、法による刑罰という暴力であっても、世論による社会的強制であっても、それが正当かどうかを決める絶対的な原則はこうである。人間が・・・誰かの行動の自由に干渉するのが正当なのは、自衛を目的とする場合だけである。文明社会で個人に力行使するのが正当なのは、ただ他人に危害が及ぶのを防ぐ場合だけである。」（J.S.ミル『自由論』27頁）

#### （4）効用の質からの功利主義批判

「満足した豚であるより、不満足な人間であるほうがよく、満足した馬鹿であるより不満足なソクラテスであるほうがよい」（J.S.ミル, 1861『功利主義論』p.57, 訳470）

#### （5）累進所得税批判

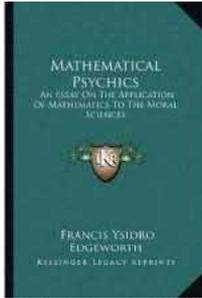
「・・・将来を考えている人を犠牲に、浪費的な人を救済することがないようにすべきだ。高所得者に、低所得者より高い税率を課すことは、勤勉と節約への課税であり、ある人が隣人より多く働き、多く節約したことへの罰金になる。」（J.S.ミル『経済学原理』p.810f, (5) 35-36）

「精力的に働く人と怠惰な人を、また熟練した人と能力のない人を同等に置くこと以上に、大きな欠陥はない。」（J.S.ミル『経済学原理』(5) 279）

### （５）停止状態

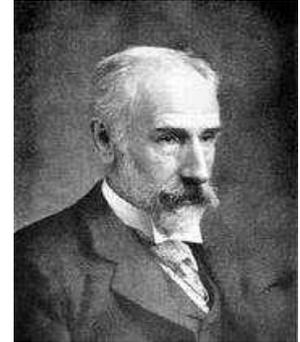
「資本と人口の停止状態は，人間的進歩の停止を意味しない。停止状態においても，精神や道徳，社会の進歩がなされ，また“人間的技術 the Art of Living”も改善され続ける。そして，立身出世に忙殺されなくなれば，人間的技術が改善される可能性は大きくなろう。産業技術でさえ，熱心かつ上首尾に研究され続けるだろうし，唯一の相違は，産業の改良が富の増大ではなく，労働（時間）の節約という，あるべき結果につながることだろう」（J.S.ミル『経済学原理』（４），p.756，訳 109 頁）

## F.Y.エッジワース（Francis Y. Edgeworth, 1845-1926）



F.Y.Edgeworth

*Mathematical Psychics: An Essay on the Application of mathematics to the Moral Science, 1881*



### （１）効用の個人間比較は可能である

「道徳的解析のために（効用の強度と持続性の他に）もう一つの次元が必要である。すなわち，ある人の幸福と他者の幸福の比較，そして構成員が異なるグループどうしの幸福の比較，ならびに平均値が異なる幸福どうしの比較が必要である。このような比較は，何らかの体系的道徳があるべきならば，避けえない。」（エッジワース 1881『数学的精神科学』 pp.7,8）

### （２）課税における最小犠牲原則

「（課税における最小犠牲原則とは），一般的には，各納税者が（課税によって被る）限界不効用が均等となる（事である）。・・・財産の不平等が特定量の課税に対して著しいものである（場合に）・・・一定量の租税が徴収されねばならないならば，一応最良の（課税）の分配は，すべての租税が最も富裕な市民によって支払われるべきだということである。一定のレベル以上の所得はすべてそのレベルまでひき下げられるべきであり，そのレベル以下の所得は非課税とされるべきである。そしてそのレベルは，徴収されることが必要とされる租税総額によって決定されるのである」（エッジワース 1897「課税の純粹理論」 p.103,130）

### （３）最小犠牲説への修正

「かくして社会主義の頂上が一瞬眺望される。しかし，ただちにそれは疑惑と留保の雲に隠されてしまう。・・・平準化原則は修正されなければならない。・・・それは資本逃避，中産階級の労働意欲の低下，貧民の略奪本能を目覚めさせ，革命を早めるという効果ともつ。・・・純粹功利主義の一応革命的な指令は常識の限界まで引き下げられねばならない。富と資本の成長や，他の諸利益についての観点によって緩和された最小犠牲説が採用されるだろう。」（エッジワース「課税の純粹理論」 pp.104-116）

### （４）貴族的功利主義

「一般的には，快樂にたいしてより大きな受容能力をもつ人々がより多くの財産と快樂を得るべきである。」（エッジワース 1881『数学的精神科学』 p.64）

## ジョン・ラスキン John Ruskin 1819-1900

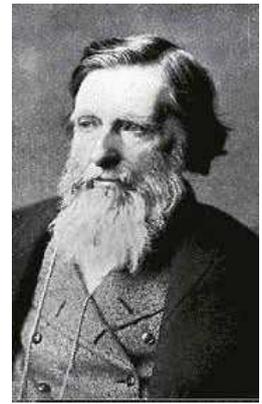
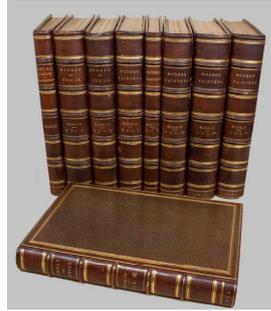
*The Works of John Ruskin*, 39 vols, George & Unwin

*The Poetry of Architecture*, 1837-38.

*Modern Painters*, 1843

*The Elements of Drawing*, 1857

*Unto this Last*, 1862



### （１）生活こそ富である 味わう力

「価値は、モノ自体の内在的なものだけではなく、所有者の活力にも依存している。そのことによって、富は有効に使用されるのである」（ラスキン，Works, Vo.17, p.166）

「経済学の究極の目的は、よい消費方法を手に入れ、豊富な物資を得ることである。言い換えれば、あらゆるモノを使い、それも優雅に使用できるものが富である。」（Vol.17,p.102）

「富についてまず第一に研究されるべきことは、国民がどれだけ多くの財を持っているかではなく、財が有益に使用され、そう使用できる人の手元にあるか、である。」（Vol.17,p.161）

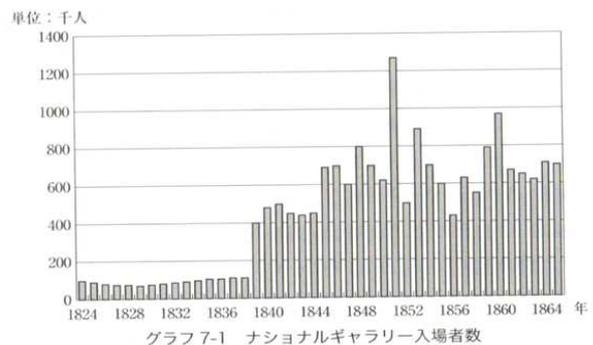
### （２）「上品さ」による階級統合

：ナショナル・ギャラリー無料化政策

1753年 大英博物館創設

1810年 無料化

1824年 ナショナル・ギャラリー無料化



「博物館・美術館の入場料無料政策は、金持ちと貧乏人を国家の名の下に集結させ、一体となる重要な手段の一つである」（ロバート・ピール首相 Hansard, 13, April, 1832. 3rd series, 12, c.467-7 and 14, c.645.）

「ナショナル・ギャラリーは労働者階級にとってパブに取って代わる余暇の場となる」（第7代シャフツベリー伯爵 Hansard, 13, April, 1832. 3rd series, 12, c.469.）

「ナショナル・ギャラリーは、異なる階級の者たちが、互いを透かし見れる場であり、ともに神の子として芸術鑑賞し、その真価を知ることによって自尊心を感じ、労働者も上流階級と同じ気高い存在であることを発見する場である」（チャールズ・キングスリー，Alton Rock, 1850年）

「暴徒のような群衆がナショナル・ギャラリーにいるのを見たが、彼らは少なくともナショナル・ギャラリーにいる間は暴徒であることを止めている」（アラン・カニングアム）

「ナショナル・ギャラリーは、労働者たちで込み入っており、その臭いと埃っぽさは耐えがたい」（モンテイーグル卿）

「ある時は、田舎からやってきた集団が、座るや肉と飲み物を取り出したので、私が注意すると、ジンははいどうぞ差し出したのには呆れた。また他の時は、食べ残しのオレンジの皮が床に散らばっているのを目にすることもあった」（トーマス・ウィン保管官）